

道徳とはなにか

“強者は道徳を蹂躪するであろう。弱者は又道徳に愛撫されるであろう。道徳の迫害を受けるのは常に強弱の中間者である（芥川龍之介）^[1]”

様々な宗教に共通する教義をうまく取り出して、最大公約数的な部分だけを形式知として体系化することができれば、大変役に立つでしょう。このように、宗教の違いを超えた汎用性・一般性の高い教義が道徳である、と考えられます。道徳は、とりわけ、宗教のもつ2つの機能（精神の安定化装置・社会の安定化装置）のうち、社会の安定化とそのための人間の飼いならしの教科書として利用されています。人間の強みの一つである、社会と協働、において、何らかの制約条件・ルールがなければ社会の規模が大きくなるにつれ、その安定を保つことが難しくなります。法・契約は、強制力によって社会の安定を保つ、有効な外生的・他律的手段です。道徳は、人間一人一人の前頭葉（脳）そのものに、行動規範を植え付けることによって社会の安定を保つ、有効な内生的・自律的手段です。人間特有の機能である「4次元世界自己客観視能力」を駆使して、人生戦略を構築する際、人間が、自分以外の他人の利益を全く考慮することなく、自己利益の最大化だけを図ると、社会は殺伐として、不安定化し、人間の強みである協働を発揮できなくなってしまう恐れがあります。従って、道徳は、社会の集団的利益と、人間の個人的利益の間に生じる矛盾・ギャップを埋めることに、必然、その力点が置かれることになるのです。

一例として、文科省（日本）の学習指導要領を見てみましょう。その中で、道徳科目は、自分自身に関すること、他人との関わりに関すること、集団や社会との関わりに関すること、生命・自然・崇高なものとの関わりに関すること、の4本柱で構成されている。1つ目の自己実現の柱を受けて、以下3つの柱は、他人・社会・自然など、いずれも自分以外の他者との関係性に力点が置かれています。自己実現の柱にも、自由と責任、節度・節制、正直・誠実、など他者との関係性が意識された内容がかなり含まれています。また、自己実現の柱における自分自身に関する教えには、向上心、克己、個性伸長、希望・勇気、真理探究など、いずれも前向きなアドバイスが列挙されていますが、宗教の持つ本来的な役割である精神安定化装置としての機能はかなり弱いように思われます。宗教の精神安定化機能は、前頭葉（脳）の全権委任を請け負うだけに、それぞれの宗教の最も核心的・本質的な教えが担っていることが多いのです。また、そのような各宗教のエッセンスは、その宗教を特徴づけるものであり、当然、他の宗教とは異なる固有の論理（ロジック）あるいは物語（ストーリー）で仕立てられているものです。道徳は、複数の宗教の共通部＝最大公約数ですから、各宗教の精神安定化装置として機能すべき教えの核心部のほとんどが、当然ながら、道徳からこぼれ落ちてしまいます。その結果、道徳の専らの役割は、異なる宗教に共通する、癖の無い、万人受けする、社会安定化装置としての機能に限られてしまうのです。例えば、仏教の核心部である「苦悩の原因である執着を離れよ」、キリスト教の核心部である「我々は生まれながらの罪人である」などのロジックは、それぞれの信仰の場である寺院や教会で教えられはするものの、様々な宗教を持つ子供達を一堂に会した学校という幼少教育の場において、道徳として採用することはできないでしょう。

個人の生きる目的、さらには精神的充足において、道徳の果たす役割は、上記で考察した通り限定的にならざるを得ません。それどころか、我々が個人の精神充足を追求する際、道徳がマイナスあるいはリスクとして作用することすらあります。道徳は、万人に有益であることを前提としているため、メッセージが、善いこと（～をしましょう）、悪いこと（～をやめましょう）、の2元論に単純化されやすいのです。この場合は良いが、この場合は悪い、というような付帯条件はなじまない。例えば、SEX についてです。SEX の善悪の線引きをどの条件に設定するかにもよりますが（既婚なら良いが、未婚はだめ？子作りのためなら良いが、快楽のためはだめ？成人はよいが、未成年はだめ？などなど）、道徳全体としては、SEX あるいは性欲は、恥ずかしいもの、隠すべきものといった負のメッセージ性が強いのは事実です。性欲=自己複製

(リモデリング)の欲は、人間のみならず、生物の生きる目的そのものであるにも関わらず、そこに大きな制限が一様にかけているというのは、驚くべきことです。女性をめぐる男性同士の競争を放置すれば、社会は不安定化してしまうでしょう。また、人間は年中発情期(=妊娠可能)であるため、社会の表舞台から性欲を覆い隠さないと、人間の強みである文明が機能しなくなるでしょう。道徳によって、性欲を社会の裏に押しやることにより、社会の表舞台においては、その人間の活躍が、異性への隠れた求愛行動・求愛メッセージとなっているのです。とりわけ男性の場合、女性は生きる目的、精神充足そのものであり、仕事のモチベーションの1つが、経済力の誇示を含め、女性へのアピールと言っても過言ではないでしょう。このように表舞台から隠蔽された性は、文明の駆動力として実にうまく機能してはいますが、人間が自然の一部であることに逆れば、性欲は、本来、制限されるべきものではないはずです。労働についても同様です。道徳は、労働や勤勉を善としています。本当にそうでしょうか。生物は、リモデリングが達成されさえすれば、本来働かないものです。経済原理の必然として、経営者(使う側)と雇用者(使われる側)が存在する以上、労働・勤勉を美德としておこななければ、社会は不安定化してしまうでしょう。誤解を恐れずに言えば、無職で一日中部屋に籠ってゲームをして過ごす引きこもりは、親の加護で十分な食料を摂取し、自己再生(リモデリング)を達成しているわけですから、精神充足を得られているかどうかを別とすれば、生物としては何ら問題ないはずです。我々の多くは、ご飯が食べられるだけの稼ぎでは満足せず、さらに働きます。では、どれだけの稼ぎがあって、一日どれだけ働けば、道徳的に許されるのでしょいうか。労働は生きていくためだけでなく、精神充足を得るためであるというかもしれません。十分な資産と精神充足を得るに足る趣味を持つ人が、働かないで趣味に興じているのは反道徳的といえるのでしょうか。万人のための一律な行動規範を提供する道徳は、もちろんそのような条件付きの問いには答えてくれません。人間分子論では、第3章で詳しく考察するように、ある個人が、自身の精神充足や幸福を追求する際の行動を制限する要因は3つあり、道徳そのものではないと考えています。それは、持続可能性(その行動が、その人にとって、持続可能かどうか)、賄い可能性(その行動が、その人の経済力に鑑み、十分賄うるものかどうか)、合理性(その行動が十分理にかなっているか)、と考えています。要するに、道徳との付き合い方や道徳の意味は、その人の置かれた状況によって、その人ごとに、大きく変わる、と考えるのです(注1)。

(注1)冒頭の言葉は、不倫によって厳しく社会から断罪された芥川が、自分自身を道徳に翻弄される庶民として残した警句です。社会的・経済的強者は、その力で社会の断罪を遠ざけ、自由や恋愛をほしいままにしたでしょうし、社会的・経済的弱者は逆に、道徳を盾に、様々な社会福祉で保護されるだろうというのです。道徳は、社会を構成する分厚い平均的、中間層にフォーカスした行動規範であるという意識が読み取れます。

参考文献

[1] 芥川龍之介、侏儒の言葉(芥川龍之介全集第13巻)、岩波書店